

ニューカマー児童を包摂する学校づくりについての検討

——ブラジル人児童を取り巻く状況と課題——

北陸学院大学 俵希實

1 目的

本研究の最終目的は、ニューカマー児童を包摂する学校づくりに必要な条件を明らかにすることである。これまでの外国人児童の教育に関する研究においては、定住、特にホスト国での定住を前提としている研究が多い。しかし、グローバル化が進展する社会では、国境を越えて移動を繰り返す児童を射程に入れることが不可避である。学校現場では「移動を繰り返す児童」を認識しつつも明確に射程に入れていないためにニューカマー児童が置かれている状況を整理することができず、彼／彼女らに関わる課題への対応がより困難になっている。そこで、2国間の移動を繰り返す児童を含んでいるブラジル人児童を対象とし、「ホスト国での定住を前提とする児童」、「母国での定住を前提とする児童」、「両国間を移動する児童」という3カテゴリを設定した上で研究を行っている。ニューカマー児童を包摂する学校づくりに必要な条件を探るために、まずはブラジル人児童を取り巻く状況と課題を整理した。本発表ではこれまで得た知見をもとに報告する。

2 方法

ブラジル人児童を取り巻く状況と課題を明らかにするために、「学校づくり」の観点から学校のみならず、家庭、地域で児童とつながりのある人々を対象として、児童との相互作用の中で認識している課題を聞き取る。調査対象地は、報告者がこれまでフィールドとしてきた石川県小松市とする。

3 結果

これまでに行った聞き取り調査の主な結果は次の通りである。学校：保護者が日本の学校文化に対して理解を示さないために児童が学校を欠席がちとなる、日本語能力にばらつきがある、日本語とポルトガル語のどちらも中途半端で学習に支障をきたしている、カリキュラムがブラジルと異なることから学習に継続性がない、文化的背景の違いから友人関係が構築できない、国際学級への参加を嫌がる児童や保護者がいる、ブラジルでは転勤が多いことから保護者は移動によって生じる子どもの苦労を重視していない、母親の精神状態が安定していないと子どもも不安定である、小・中学校卒業後、高校進学は果たせるようになったが中退する生徒があとをたたない家庭：使用言語が異なるため親子で意思疎通ができない、日本の学校は子どもがやりたくないと思うこともさせる、家庭のことは親に任せて欲しい地域：サポートできる人が減少している

4 結論

小松市にブラジル人児童が増加し始めて約25年の歳月が経過しているにもかかわらず、受け入れ初期の頃から継続して日本語、日本文化・習慣に関わる課題が生じていること、日本国内を含む移動が原因で生じている課題が多いこと、家庭環境が児童に大きな影響を及ぼしていることが明らかとなった。これらの課題の多くは「ホスト国での定住を前提とする児童」、「母国での定住を前提とする児童」、「両国間を移動する児童」のすべてのカテゴリの児童に通じる課題であるが、「両国間を移動する児童」にはより一層深刻な課題となっている。本報告の結論として、ニューカマー児童を包摂する学校づくりにおいて、児童の家庭環境に着目することの必要性が明らかとなった。

※ 本研究は JSPS 科研費 18K02427 の助成を受けたものです。